

日英語のオノマトペ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 皆島, 博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/759

日英語のオノマトペ

皆 島 博

(2003年9月13日受付)

1. はじめに

本稿では、日英語のオノマトペ¹⁾について対照言語学的考察を行なう。オノマトペは、日本語の語彙体系を特徴づける特色²⁾の一つであるが、実際、日本語には枚挙に暇がないほど、オノマトペを使った表現が豊富である。しかし、日本語から英語への翻訳という観点から見ると、以下の用例(九頭見 2003: 13)に見られる通り、必ずしも日本語のオノマトペが英語においてもオノマトペによって表現されているとは限らない。

- (1) Japanese: 川の方から激しく吹きつける風が屋根の電線をヒューヒュー鳴らした。
English: The fierce wind from the river made the wires above the roofs *hum*.
- (2) J: みやげ物屋の店先では、風鈴がちりん、ちりんとさわやかな音を聞かせていた。
E: The *f_rin* in front of the omiyage shop were emitting a refreshing *tinkling* sound.
- (3) J: 遠出する以外はほとんど車に乗らない。げたをからんころんとひびかせて歩く。
E: I hardly ever ride in a car except on long trips. I always *clip-clop* along in my geta.
- (4) J: 彼は続けざまにこんこんとせきをした。
E: He kept *coughing* away.
- (5) J: ねこじゃあるまいし、そうびちゃびちゃ音をたててスープを飲むものじゃないよ。
E: Don't *slurp* your soup like that; you're not a cat.
- (6) J: 運動の後、水道の蛇口に口をつけてごくごくと飲む。うまいなあ、と思う。
E: After taking exercise I *gulped* down water straight from the tap. It tasted very good that way!
- (7) J: 作法どおりに食べる洋食もなかなか楽しい。でもお新香でお茶づけさらさらのほうが気楽だなあ。
E: I do enjoy a formal western-style dinner. But I'm much more at home *sipping*

ochazuke with oshinko.

- (8) J: 谷川の水でじゃぶじゃぶ野菜を洗う。水が、朝日を受けて、無数のガラス片のようにきらめく。
 E: I *dabble* the vegetables around in the mountain stream and the water sparkles in the morning sun like so many fragments of glass.
- (9) J: 母が慣れた手つきでさくさくとにんじんをきざんでいる。
 E: Mother is *defly* chopping the carrots with practiced hands.
- (10) J: ぞうきを堅くしぼって廊下をきゅっきゅつとふく。とてもいい気持ち。
 E: I wrung the cloth out hard and rubbed the floor of the corridor *vigorously*. Ah, what a glorious feeling!

上記の用例を見ると、(1)(2)(3)のように英語でもオノマトペを用いた表現に翻訳されることもあるが、(4)(5)(6)(7)(8)のように一般動詞³⁾を用いた表現に翻訳されたり、(9)(10)のように一般副詞を用いた表現に翻訳されたりもする。これらの事実を踏まえて、本稿では、日本語のオノマトペを含む表現が英語ではどのように翻訳されるのか、という視点から、日英語の表現形式における差異について対照言語学的な考察を行なう。

2. オノマトペとは

日本語のオノマトペを含む表現が英語への翻訳においていかなる形式で表現されるのか、ということを見ていくにあたり、まず、この節では、オノマトペの定義について諸説を概観し、本稿ではオノマトペをどのようにとらえるのか、ということを確認しておきたい。

2.1 日本語におけるオノマトペの定義

オノマトペといえは、日本語において特筆すべき語彙の範疇を構成することは論を待たないが、ここでは、国語辞典やオノマトペの辞典においてオノマトペがどのように定義されているのか概観する。

2.1.1 『ハイブリッド新辞林』(三省堂)

- (11) a. オノマトペ：擬音語・擬声語・擬態語を包括的という語。
 b. 擬声語：事物の音や人・動物の声などを表す語。「ざわざわ」「わんわん」の類。
 c. 擬態語：物事の状態や様子などを感覚的に音声化して表現する語。「にやにや」「うろうろ」「じわじわ」「びかり」「ころり」「てきぱき」などの類。

2.1.2 『広辞苑第五版』(岩波書店)

- (12) a. 擬声語：人・動物の声をまねた語。「きゃあきゃあ」「わんわん」の類。写声語。

- b. 擬音語：実際の音をまねて言葉とした語。「さらさら」「ざざあ」「わんわん」など。
- c. 擬態語：視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象をことばで表現した語。「にやにや」「ふらふら」「ゆったり」の類。

2.1.3 『現代擬音語擬態語用法辞典』（東京堂）

- (13) a. 擬音語：これは、活字化できる音声連続及び発音できる文字表記によって対象の音声を表現したもので、一定グループの人々(多くは同国語人)の間で抽象的・普遍的に通用する。
- b. 擬態語：活字化できる音声連続及び発音できる文字によって対象の様子を表現したもので、一定の形と意味をもち、一定のグループの人々の間で抽象的・普遍的に通用する。

2.2 言語学的なオノマトペの定義

オノマトペは、日本語だけでなく、他の諸言語においても多少なりとも見出されるものである。ここでは、言語学や英語学の枠組みの中ではオノマトペがどのように定義されているのかを概観する。

2.2.1 石橋(1973: 609)

- (14) 自然現象の音にまねて語を形成する過程またはその語をいい、これによって形成された語を Onomatopoeic word; Onomatop(擬声語)と呼ぶことがある。

2.2.2 大塚・中島(1982: 802)

- (15) Onomatopoeia オノマトピーア, 擬音(語) : 自然界の音を言語的に再現または暗示することをいう。例えば、犬の吠え声を英語ではbowwow, 雄鶏の鳴き声をcock-a-doodle-dooというが、これらは明らかに自然界の音を再現した擬音である。

2.2.3 田中(1988: 445)

- (16) Onomatopoeia 擬音(語) : 動物の鳴き声や水の流れる様子など、自然界の音を模倣したり、それを象徴的に再現すること、またそのような語を指す。擬声(語)ともいう。[.....] さらに、特に日本語では、ニコニコ、ソワソワ、スベスベなど、実際には音を伴わないのに、あたかも音を発しているかのように、人や事物の状態を描写する語が多く、これらは擬態語と呼ばれている。

2.2.4 亀井・他(1996: 267, 271)

- (17) a. 擬声語：動物の声や自然界のもろもろの音、または、およそ物の発する音を模写した

もの。たとえば、ホーホケキョ、ワンワン、ゴロゴロ、ピーポー等々。

- b. 擬態語：音声象徴 (sound symbolism) によって感覚・感情を写し出す一群の語。たとえば、ハッキリ、ボンヤリなどはそうである。[.....] 擬態語は、普通、畳音 (reduplication) をするのが特徴である。たとえば、ホカホカ、ガツガツ、など。

2.2.5 Matthews (1997: 256)

- (18) Onomatopoeia: A word or process of forming words whose phonetic form is perceived as imitating a sound, or sound associated with something, that they denote. E.g. *peewit* or Dutch *kievit* are onomatopoeic words for a lapwing, whose cry they mimic.

2.2.6 Trask (1997: 157)

- (19) Onomatopoeia: The coining or use a word which attempts to represent a non-linguistic sound with ordinary speech sounds, such as English *buzz*, *clink*, *boom*, *cock-a-doodle-do* and *meow*.

2.3 オノマトペの三区分

上記の2.1と2.2節で見たオノマトペの定義は、日本語に関するものと言語学・英語学に関するものとの区別があるにもかかわらず「人間・動物の声や自然現象などの音を模倣した語」という点では共通している。しかしながら、オノマトペをいかに下位区分するのか、という点についてはとらえ方がまちまちである。したがって、本稿では、便宜上、以下のような三区分⁵⁾を設けておくことにする。

- (20) a. 擬声語
b. 擬音語
c. 擬態語

まず、(20a)の「擬声語」は、人間・動物など「生き物」が放出する音(声)を模倣したもの、次に、(20b)の「擬音語」は、生き物以外の「無生物」「自然現象」などが放出する音を模倣したもの、最後に、(20c)の「擬態語」は、実際に音がするものではないが、あたかも音がするものであるかのごとく行為や感情などともなうイメージを感覚的・象徴的に表現した語、と定義しておくことにする。

3. 日本語のオノマトペに対応する英語表現

この節では、日本語のオノマトペが英語ではどのような表現形式(構造)で表されるのか、とい

うことを見ていくが、資料は主として、次の作品からとっている：吉本ばなな、『キッチン』、福武文庫、1991年。英語訳、Megan Backus訳、Kitchen、福武書店、1993年。なお、用例の末尾に「キ」、Kと記してあるのはこれらの資料の略号である。なお、本稿で使用した資料から収集された日本語のオノマトペの内訳は以下の通りである。

擬声語	5 (1.5%)
擬音語	41 (12.3%)
擬態語	286 (86.1%)
合計	332 (100%)

以下、日本語のオノマトペを構成する「擬声語」「擬音語」「擬態語」の3つについて、これらが英語に翻訳される場合、どのような表現形式をとるのか、ということを見ていくことにする。

3.1 擬声語に対応する表現形式

ここでは、日本語の擬声語に英語のどのような表現形式が対応するのかということを見ていく。本稿で使用した資料における日本語の擬声語の事例は5例であり、これらに対して、以下のような英語の表現形式の対応が見られた。

動詞を用いた表現	3 (60.0%)
副詞を用いた表現	1 (20.0%)
擬声語を用いた表現	1 (20.0%)
合計	5 (100%)

以下、日本語の擬声語が英語に翻訳される場合、どのような表現形式をとるのかを見ていく。

3.1.1 動詞を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬声語に対して動詞を用いた表現で対応させていた例が3例見られた。そのうちの2例を以下に示す。

(21) J: 彼女ははあはあ息をつきながら少しかすれた声で、「はじめまして」と笑った。(キ、p.17)

E: "How do you do," she said in a slightly husky voice, still *panting*, with a smile.
(K, p.11)

(22) J: そして、自分の荷物にはさまれて、暗がりがかがんで、もうわんわん泣いた。(キ、p.54)

E: Jammed between my own bags, stopped over, I *sobbed*. (K, p. 35)

上記の(21)では、日本語の「はあはあ(息をつく)」という表現に対して英語ではpant「あえぐ」、(22)では、「わんわん(泣く)」という表現に対して英語ではsob「すすり泣く」という動詞一語で表現されている。

3.1.2 副詞を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬声語に対して副詞を用いた表現で対応させていた例は以下の1例しか見られなかった。

(23) J: あ、女の子かなあ……と眠たい頭で申し訳なく思い、雄一を見たら、まだグーグー寝ている。(キ, p.102)

E: Aha, I thought - a girl, I sheepishly looked over at Yuichi, but he was still *sound* asleep(K,p.102)

上記の(23)では、日本語の「グーグー」という擬声語の表現が英語では、*sound*「完全に」という一般的な副詞一語で表現されている。

3.1.3 擬声語を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬声語に対して、英語訳でも同じく擬声語を用いた表現で対応させていた例は以下の1例しか見られなかった。

(24) J: 私が、あ、あ、と言っているうちにちかちゃんはおいおい泣きはじめて店中の人がちらを見た。(キ, p.131)

E: When she began to sob audibly, “*Wah. Wah,*” everyone in the place turned to stare at her(K,p.86)

上記の(24)では、日本語の「おいおい(泣く)」という擬声語を用いた表現が英語でも*wah*「わん」という英語の泣き声を模した擬声語で表現されている。

3.2 擬音語に対応する表現形式

ここでは、日本語の擬音語に英語のどのような表現形式が対応するのかということを見ていく。本稿で使用した資料における日本語の擬音語の事例は41例であり、これらに対して以下のような英語の表現形式の対応が見られた。

擬音語を用いた表現	19 (46.3 %)
動詞を用いた表現	13 (31.7 %)
名詞を用いた表現	3 (7.3 %)
形容詞を用いた表現	1 (2.4 %)
訳出なし	5 (12.2 %)
合計	41 (100 %)

以下、日本語の擬音語が英語に翻訳される場合、どのような表現形式をとるのかを見ていく。

3.2.1 擬音語を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬音語に対して、英語訳でも同じく擬音語、あるいは、擬音語を語源とする語を用いた表現で対応させていた例は19例が見られた。以下その例文の一部を示す。いくつかのバリエーションがあるが、そのうちの1つは、日本語の擬音語に英語の擬音語そのものが対応しているものである。

(25) J: ピンポンとふいにドアチャイムが鳴った。(キ, p. 9)

E: *Ding-dong*. Suddenly the doorbell rang. (K, p. 5)

(26) J: 冷蔵庫のぶんという音が、私を孤独な思考から守った。(キ, p. 8)

E: The *hum* of the refrigerator kept me from thinking of my loneliness. (K, p. 5)

(27) J: ……廊下をぱたぱた走るスリッパの音や、旅館の人の声で、はっと、目覚めたら、すっかり天気が変わっていた。(キ, p.156)

E: I awoke with a start to the *pit-a-pat* of slippers and the voices of the inn employees in the hall. (K, p. 102)

(28) J: 夜の中を、ちりちりと鈴の音が遠ざかっていった。(キ, p. 196)

E: The *tinkle* of the bell disappeared into the night. (K, p. 132)

上記の(25)では「ピンポン」に対してding-dong 「キンコンカーン」、(26)では「ぶん」に対してhum 「ブンブン」、(27)では「ぱたぱた」に対してpit-a-pat 「パタパタ」、(28)では「ちりちり」に対してtinkle 「チリンチリン」という英語の擬音語が対応している。

第2のバリエーションとしては、日本語の擬音語に対して、英語では「with + 擬音語」という形式を対応させている場合がある。

(29) J: 「信じらんないよな。」と雄一が言った。袋をどさりと置く。(キ, p. 91-92)

E: “Unbelievable,” he said, putting down his burden *with a thud*. (K, p. 60)

- (30) J: するとガチャン！と電話が切れてしまったのだ。(キ, p. 102)
 E: The party on the other end hang up *with a crash*. (K, p. 67)
- (31) J: そして、ばーん、とドアをすごい音で閉めて出ていった。(キ, p. 112)
 E: Then, slamming it *with a bang*, she was gone. (K, p. 73)
- (32) J: 彼女は私をきつ、とにらんで、「言いたいことは全部言いました。失礼します。」と冷たく言い放ち、コツコツ音をたててドアへ歩いていった。(キ, p. 112)
 E: She gave me an evil scowl and said in a chilly voice, "I've said all I had to say. Excuse me." Those were her parting words. *With the click, click* of her little beige pumps, she turned and walked to the door. (K, p. 73)

上記の(29)では「どさり(と)」に対してwith a thud 「ドシン(という音)とともに」、(30)では「ガチャン(と)」に対してwith a crash 「ガチャン(という音)とともに」、(31)では「ばーん」に対してwith a bang 「バタン(という音)とともに」、(32)では「コツコツ」に対してwith the click, click 「カチ, カチ(という音)とともに」というように、一種の付帯状況を表す表現として英語の擬音語が対応している。なお、(32)の英語訳では、clickという擬音語を繰り返しているが、これは翻訳上の効果として、日本語の擬音語が持つ畳語性を反映させているのではないかと思われる。

第3のバリエーションとしては、日本語の擬音語に対して、英語では擬音語から派生した動詞を対応させているものがある。

- (33) J: 風で窓ががたがたゆれる。(キ, p. 218)
 E: I heard the windows *rattle* in the wind. (K, p. 148)
- (34) J: 店のおばさんが忙しそうにやってきて、どっかんと水を置いた。(キ, p. 127)
 E: The waitress, bustling about in the noon rush, *slammed* a glass of water down before me. (K, p. 83)

上記の(33)では「がたがた」に対して動詞rattle 「ガタガタ鳴る」、(34)では「どっかん」に対して動詞slam 「ドンと置く」という英語の擬音語に由来する動詞が対応している。

第4のバリエーションとしては、日本語の擬音語に対して、動詞の-ing形を形容詞的に用いたもので対応させているものがある。

- (35) J: 雨水が何かの汚い水たまりに、足がびしゃっとつかった。(キ, p. 148)
 E: My legs made a *splashing* noise as I lolled in filthy pool of what must have been rain water. (K, p. 97)
- (36) J: 木々が、風にざわざわとゆれるシルエットが淡くうつる。ゆっくりと、天空は動く。

(キ, p. 212)

E: The faint outline of the *rustling* trees trembled in the wind; gently, the heavens began to move. (K, p. 144)

上記の(35)では「びしゃっ(とつかった)」に対してmade a splashing noise 「水がはねる音を出した」,(36)では「ざわざわ(とゆれる)」に対してrustling trees trembled 「サラサラという音をたてる木が震えた」という表現が対応しているが、日本語の原文では副詞的に用いられている擬音語が英語訳では形容詞として用いられているので、原文と英語訳の文とでは、当然、統語構造が異なっている。

最後のバリエーションは、日本語の擬音語に対して、分詞構文を対応させているものである。

(37) J: 車のキーをガチャガチャならしながら雄一は戻って来た。(キ, p. 19)

E: Yuichi returned, *jingling* the car keys. (K, p. 12)

(38) J: カギをちゃりちゃり言わせながら星空の下を歩いていたら、涙があとからあふれはじめた。(キ, p. 74)

E: As I walked along under the starry sky, my keys *jingling*, the tears began to flow one after the other. (K, p. 47)

(39) J: ちりちり、とかすかな音をたててだれもないその空間に鐘は鳴った。(キ, p. 213)

E: The sound came, faintly *tinkling*, from a spot where no one was standing. (K, p. 144)

上記の(37)では「ガチャガチャ(ならしながら)」に対してjingling the car keys 「車のカギをチリンチリンさせながら」,(38)では「(カギを)ちゃりちゃり(言わせながら)」に対してmy keys jingling 「自分のカギをチリンチリンさせながら」,(39)では「ちりちり(とかすかな音をたてて)」に対してfaintly tinkling 「かすかにチリンチリンと鳴って」のようにいずれも「付帯状況」を表す分詞構文で対応させている。

3.2.2 動詞を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬音語に対して、一般動詞を用いた表現で対応させていた例は13例が見られた。以下そのうちの一部の例文を示す。

(40) J: 木がごうごうしなってゆれる。(キ, p. 157)

E: The trees swayed and *roared*. (K, p. 102)

(41) J: 砂が、ひんやり、さくさくしていた。(キ, p. 158)

E: The frozen sand *crunched* beneath my feet. (K, p. 104)

(42) J: ふきんを全部洗ってさらし, 乾燥機にかけてごうんごうんと回っているのを見ているうちに心が実にしっかりしてきたのがわかった。(キ, p. 87)

E: I washed and bleached all the dish towels, and while watching them *go round and round* in the dryer I realized that I had become calmer. (K, p. 56)

上記の(40)では「ごうごう」に対して *roar* 「轟音を発する」, (41)では「さくさく」に対して *crunch* 「粉々に砕く」, (42)では「ごうんごうん」に対して *go round and round* 「回りに回る」, という一般動詞を用いた表現が対応しているが, 特に(42)においては, *round* という副詞を繰り返すことで, 翻訳上の効果として, 日本語の擬音語の持つ畳語性を英語訳に反映させようとしたのではないかと思われる。

3.2.3 名詞を用いた表現

本稿で使用した資料では, 日本語の擬音語に対して, 名詞を用いた表現で対応させていた例は3例が見られた。そのうち一部の例文を以下に示す。

(43) J: そうして, ドアがガチャガチャと開いて, ものすごい美人が息せききって走りこんできたのは, その時だった。(キ, p. 17)

E: Just then, with the *scratch* of a key in the door, an incredibly beautiful woman came running in, all out of breath. (K, p. 11)

(44) J: チン, とエレベーターが止まり, 私の心が瞬間, 真空になった。(キ, p. 93)

E: The elevator stopped with a little *jerk*. (K, p. 61)

上記の(43)では「ガチャガチャ(と)」に対して *with the scratch (of a key)* 「(カギを)引かく音とともに」, (44)では「チン(, と)」に対して *with a little jerk* 「ガタンという音とともに」といういずれも *with* をとまなかった付帯状況を表す表現に英語訳されている。

3.2.4 形容詞を用いた表現

本稿で使用した資料では, 日本語の擬音語に対して, 一般形容詞を用いた表現で対応させていた例は以下の1例しか見られなかった。

(45) J: 夜は雨だった。しとしとと, あたたかい雨が街を包む煙った春の夜を, 地図を持って歩いていった。(キ, p. 12)

E: It was raining that hazy spring night. A *gentle*, warm rain enveloped the neighborhood as I walked with directions in hand. (K, p. 8)

上記の(45)では、日本語のオノマトペの「しとしと(と)」は「包む」を修飾する副詞であるが、英語訳ではgentle「おだやかな、しずかな」という形容詞に翻訳されている。その結果、rainを修飾することになり、A gentle, warm rain enveloped the neighborhood「おだやかな、あたたかい雨が街を包む」という、原作の日本語の文とは統語構造が異なる表現形式をとっている。

3.3 擬態語に対応する表現形式

ここでは、日本語の擬態語に英語のどのような表現形式が対応するのかということを見ていく。本稿で使用した資料における日本語の擬態語の事例は286例であり、これらに対して、以下のような英語の表現形式の対応が見られた。

動詞を用いた表現	74 (25.9%)
副詞を用いた表現	59 (20.6%)
形容詞を用いた表現	50 (17.5%)
名詞を用いた表現	31 (10.8%)
擬態語を用いた表現	4 (1.4%)
その他の表現	19 (6.6%)
訳出なし	49 (17.1%)
合計	286 (100%)

以下、日本語の擬態語が英語に翻訳される場合、どのような表現形式をとるのかを見ていく。

3.3.1 動詞を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬態語に対して動詞を用いた表現で対応させていた例は74例見られた。そのうちの一部の例文を以下に示す。

- (46) J: 「あなたもやさしい子ね。」彼であるところの彼女は、にこにこしていた。(キ, p. 30)
 E: “You’re a good kid, too.” She *beamed*. (K, p. 19)
- (47) J: 胸がどきどきして、足がふるえるように思えた。(キ, p. 213)
 E: My heart was *pounding*. I realized my legs were trembling. (K, p. 144)
- (48) J: 私はかぜをひいてしまい、ジョギングも休んでうつらうつらしてベッドにいた。(キ, p. 187)
 E: I had caught a cold and was *drowsing* in bed. I hadn’t even been able to go jogging. (K, pp. 125-126)

- (49) J: 毎日, 明日が来てまたチャレンジできるのが楽しみでぞくぞくした。(キ, p. 91)
 E: Everyday I *thrilled* with pleasure at the challenges tomorrow would bring.(K, p. 59)
- (50) J: 悪寒が走り, ぞくぞくして体中が痛んだ。(キ, p. 203)
 E: I had the chills; I *shuddered*, my whole body in pain. (K, p. 137)

上記の(46)では「にこにこ(して)」に対してbeamed 「ほほえんだ」,(47)では「ドキドキ(して)」に対してpounding 「心臓が鼓動する, 強く打つ」,(48)では「うつらうつら(して)」に対してdrowsing 「居眠りする」という一般的な英語の動詞が対応している。(49)と(50)については, 原作の日本語の擬態語は「ぞくぞく」であるが,(49)は「快感」で,(50)は「寒気」で「ぞくぞく」するわけであり, それぞれ含意が異なっている。その違いが, 英語への翻訳におけるthrilled 「ぞくぞく, わくわくした」とshuddered 「寒さで震える」という動詞の訳し分けに反映させられている。

3.3.2 副詞を用いた表現

本稿で使用した資料では, 日本語の擬態語に対して一般副詞を用いた表現で対応させていた例は59例見られた。そのうちの一部の例文を以下に示す。

- (51) J: 彼も年を取ったなあ。と私はしみじみ思う。(キ, p. 50)
 E: I felt very *keenly* how old he had become. (K, p. 32)
- (52) J: 胸の内が嵐なのに, 淡々と夜道を歩く自分の映像がうっとうしかった。(キ, p. 75)
 E: In spite of the tempest raging within me, I walked the night path *calmly*. (K, p. 48)
- (53) J: 私はのろのろと起きあがり, お茶を飲もうと台所へ歩いた。(キ, p. 204)
 E: I *sluggishly* got up and went to the kitchen for some tea. (K, p. 138)
- (54) J: 私は読みおえて, 手紙を元のようにそっとたたんだ。(キ, p. 83)
 E: When I finished reading I *carefully* refolded the letter. (K, p. 53)
- (55) J: 閉め出されるとこわいので裏の非常口のドアのカギをそっと開けておいた。(キ, p. 134)
 E: For fear of getting locked out, I *quietly* unbolted the rear emergency door.(K, p. 88)

上記の(51)では「しみじみ」に対して(very) keenly 「痛烈に, 激しく」,(52)では「淡々と」に対してcalmly 「静かに, 冷静に」,(53)では「のろのろ(と)」に対してsluggishly 「緩慢な動きで」という一般的な副詞が対応している。(54)と(55)については, 原作の日本語の擬態語は「そっ(と)」であるが,(54)は「慎重に, 注意深く」(「手紙を)たたんだ」のでcarefully,(55)は「静かに」(「カギを)開けておいた」のでquietlyというようにそれぞれの副詞の含意の違いに応じて訳し分けられている。

なお、通常、「にこにこ(笑う)」といった擬態語は、grinという動詞一語で英語に翻訳されることが多いが、以下の例では、様態の副詞付きの動詞に訳されている。

(56) J: 青い服を着て、にこにこ笑いながら私を見てこちらにやってくる。(キ, p. 205)

E: Dressed in blue, grinning *broadly*, she looked at me and came toward me. (K, p. 139)

上記の(56)では「にこにこ(笑い)」に対してgrinning broadly 「露骨に、無遠慮に、下品に笑う」という英語の表現に訳されており、原作の日本語の表現よりも「強い」感じの表現⁹⁾になっているのが興味深い。

3.3.3 形容詞を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬態語に対して一般形容詞を用いた表現で対応させていた例は50例見られた。いくつかのバリエーションがあるが、第1は、限定用法で用いられている場合である。そのうちの一部の例文を以下に示す。

(57) J: 真夜中、しんとした台所に声がよく響いて楽しかった。(キ, p. 60)

E: It was so much fun, hearing our voices in the *silent* kitchen in the middle of the night. (K, p. 38)

(58) J: 外からのひんやりした風が入ってきて、熱っばいほほをひやした。(キ, p. 205)

E: An *icy* wind came in through the window, freezing my feverish cheeks. (K, p. 139)

上記の(57)では「しん(とした)」に対してsilent 「静かな」、(58)では「ひんやり」に対して「氷のような、とても冷たい」という一般形容詞の限定用法が対応している。

第2は、日本語の「擬態語 + スル(ナル、ツク)」という形式に一般形容詞が対応するケースである。

(59) J: 私は5月が来るまでだらだらすることを、自分に許した。(キ, p. 32)

E: I gave myself permission to be *lazy* until May. (K, p. 21)

(60) J: 私は妙にうきうきして楽しかった。(キ, p. 135)

E: I felt strangely *lighthearted*. I was excited. (K, p. 88)

(61) J: ポケットの中でつないだ手のひらはいつもあたたかくばさばさした感触だった。(キ, p. 195)

E: Our hands, joined in my pocket, palms touching, felt very warm and *soft*. (K, p. 131)

- (62) J: 「……こういうのって、正当防衛で、チャラになるんだったわよねえ？ (キ, p. 70)
 E: “There!” she said. “Self-defense, that makes us *even*.” (K, p. 45)
- (63) J: 足が何となくふらついていだし、熱も上がりそうな感じだったからだ。(キ, p. 188)
 E: My legs were *wobbly* and it felt like my fever was getting worse. (K, p. 126)

上記の(59)では「だらだら(する)」に対してlazy「怠惰な」、(60)では「うきうき(して)」に対してlighthearted「気楽な、陽気な」、(61)に対して「ばさばさ(した)」に対してsoft「柔らかな手触りの、なめらかな」、(62)では「チャラ(になる)」に対してeven「対等、公平な」、(63)「ふら(ついていた)」に対してwobbly「不安定な」という一般形容詞が対応しているが、いずれも補語としての用法で用いられている。

一般形容詞を用いた表現には、以下のように比較級を用いた表現で対応させているものも見られた。

- (64) J: 山々の黒い影が、闇よりもずっしりと黒く街を見つめている。(キ, p. 135)
 E: The dark shadows of the mountains loomed *blacker* than the night sky over the town below. (K, p. 88)

上記の(64)では「ずっしりと(黒く)」に対してloomed blacker「より黒くぼうっと見えた」という表現が対応している。さらに、以下の例では、形容詞の比較級をandでつないで繰り返して用いている。

- (65) J: この半年……おばあちゃんが死んだところから、えり子さんが死ぬまで、表面的には私と雄一はずっと2人笑顔でいたけれど、内面はどんどん複雑化していった。(キ, pp. 132-133)
 E: That last half-year ... Until Eriko's death my relationship with Yuichi had been laughing and carefree, but under the surface it had been growing *more and more* complicated. (K, p. 87)
- (66) J: 瞳の奥にひそむとがったものが風にさらされて、どんどん冷えてゆく気がした。(キ, p. 75)
 E: My eyes were stung by the lashing wind, and I began to feel *colder and colder*. (K, p. 47)

上記の(65)では「どんどん」に対してmore and more「ますます」、(66)では「どんどん」に対してcolder and colder「ますます寒く」という表現が対応している。このように、形容詞の比較級

(の繰り返し)を用いての英語訳は、日本語のオノマトペのもつ畳語性を英語の表現形式に反映させようとしたものと思われる。

3.3.4 名詞を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬態語に対して一般名詞を用いた表現で対応させていた例は31例見られた。いくつかバリエーションがあるが、第1は、「in + 名詞」の形で日本語の擬態語を英語で翻訳しているものが多かったが、その例の一部を以下に示す。

(67) J: 葬式がすんでから3日は、ぼうっとしていた。(キ, p. 7)

E: Three days after the funeral I was still in a *daze*. (K, p. 4)

(68) J: 「ごめんね、雄一。[.....] 朝なら時間とれるから、みかげさんには泊まってもらってね。」とせかせか言い、赤いドレスをひるがえして玄関に走って行った。(キ, p. 18)

E: “I’m sorry, Yuichi. [.....] I hope Mikage will agree to spend the night.” She was in a *rush* and ran to the door, red dress flying. (K, p. 11)

上記の(67)では「せかせか」に対してin a rush 「慌しさの中で」、(68)では「ぼう(っ)」に対してin a daze 「茫然の中で」という副詞的な意味合いを持った表現が対応している。

第2のバリエーションとしては、「give + 名詞」の形で日本語の擬態語を英語で翻訳しているものであるが、その例の一部を以下に示す。

(69) J: 「何が？」と本当に不思議そうにきょとんとした。(キ, p. 43)

E: “What are you talking about?” he said, giving me a mystified, *stupid look*. (K, p. 27)

(70) J: 彼は苦笑した。その堂々とした笑顔が私をどきりとさせた。(キ, p. 45)

E: He smiled bitterly. It gave me a *start* in its contrast to his usual smile. (K, p. 28)

上記の(69)では「きょとん」に対して(giving me a [mystified]) *stupid look* 「(不思議そうな)間の抜けたような顔(をする)」、(70)では「どきり」に対して(gave me a) *start* 「驚き、はっとすること(を私に与えた)」という英語の表現が対応している。

3.3.5 擬態語を用いた表現

本稿で使用した資料では、日本語の擬態語に対して英語訳でも擬態語を用いた表現で対応させていた例は4例見られた。そのうちの1例を以下に示す。

(71) J: 乾いた清潔なふきんが何まいもあって白いタイルがびかびか輝く。(キ, p. 16)

- E: Lots of tea towels, dry and immaculate. White tile catching the light (*ting! ting!*)
(K, p. 3)

上記の(71)では「ぴかぴか」に対してting 「チリンチリン, リンリン」という英語の表現が対応しているが, これは基本的には鈴などの音を模倣した擬音語である。原作の日本語では擬態語で表現されているものが英語訳では擬音語で翻訳されているのが興味深い点である。

3.3.6 その他

本稿で使用した資料では, 上記の3.3.1~3.3.5節のいずれのカテゴリーにも含まれないものとして19例が見られたが, イディオムを用いた表現によって英語に翻訳しているものが大勢を占めた。イディオムのバリエーションが最も多かったので, そのうちの一部の例文を以下に示す。

- (72) J: 目の前に流れてきてゆっくり止まり, 人々は並んでぞろぞろ乗り込む。(キ, p. 52)
E: It seemed to float to a stop before my eyes, and, the people lined up, got on, *one by one*. (K, p. 33)
- (73) J: 何の展望もなくじりじりと枯れてゆくように日々は過ぎてゆく。(キ, p. 168)
E: Without a prospect in sight, day after day went by, like losing one's mind *bit by bit*. (K, p. 113)
- (74) J: 私が大学をきっぱりやめて料理研究科のアシスタントになったのは秋の初めだった。(キ, p. 73)
E: It was early in the fall when I left the university *once and for all* and got a job as an assistant in a cooking school. (K, p. 46)
- (75) J: 宿についてふとんにもぐりこみ, あまりの寒さに暖房をつけっ放しで私はぐったりと眠り込んだ。(キ, p. 156)
E: Back at the inn, the heat in my room still on, I burrowed under the covers and fell asleep, *dead to the world*. (K, 102)

上記の(72)では「ぞろぞろ」に対してone by one 「一人一人, 一人ずつ」, (73)では「じりじり」bit by bit 「少しずつ, 徐々に」, (74)では「きっぱり」に対してonce and for all 「この一回限りで」, (75)では「ぐったり(と眠り込んだ)」に対してdead to the world 「ぐっすり眠っている, 前後不覚の」という英語のイディオムが対応している。以下のような例もそうであるが, さらに迂言的・分析的⁷⁾なイディオムが対応している。

- (76) J: いつも目をみはるような上品なセンスの服を身にまとい, 気持ちよくきちんとしてい

る。(キ, p. 105)

E: Their clothes were always *in the best of taste*, the kind that you can't help but stare at. (K, p. 69)

(77) J: 男のくせに私, めちゃめちゃ泣いちゃってたから, くそ寒いのにタクシーに乗れないのよ。(キ, p. 124)

E: "Because I was *crying my eyes out*, I couldn't take a taxi." (K, p. 81)

上記の(76)では「きちん(と)」に対して *in the best of taste* 「上品な, 儀礼に合った」, (77)では「めちゃめちゃ(泣いちゃってた)」に対して *cry one's eyes out* 「ひどく泣く, 目を泣き腫らす」という英語のイディオムが対応している。なお, 本稿で使用した資料では, イディオムを用いた表現以外のものとしては, 以下のような例が見られた。

(78) J: 草花の呼吸を聞いて, カーテンの向こうの夜景を感じながら, いつもすっと眠れた。
(キ, p. 33)

E: Listening to the quiet breathing of the plants, sensing the night view through the curtains, I slept *like a baby*. (K, p. 22)

上記の(78)では, 日本語の「すっ」という擬態語に対して, 英語訳では *like a baby* 「赤ん坊のように」という比喩的な表現が対応している。

4. おわりに

本稿では, 日本語ではオノマトペを用いて表現するところを英語ではどのように表現するのか, ということについて対照言語学的な考察を行なった。第3節においては, 日本語のオノマトペを「擬声語」「擬音語」「擬態語」の三つに分けて, それらが英語への翻訳においてどのような表現形式をとるのか, ということを見た。ここで, 総括として, 日本語のオノマトペが「擬声語」「擬音語」「擬態語」の区別に関係なく, 英語への翻訳において, どのような表現形式をとるのか⁸⁾, ということを表にまとめて以下に示す。

	擬声語	擬音語	擬態語	合計 (%)
動詞を用いた表現	3	13	74	90 (27.1%)
副詞を用いた表現	1	0	59	60 (18.1%)
形容詞を用いた表現	0	1	50	51 (15.4%)
名詞を用いた表現	0	3	31	34 (10.2%)
オノマトペを用いた表現	1	19	4	24 (7.2%)
その他の表現	0	0	19	19 (5.7%)
訳出なし ⁹⁾	0	5	49	54 (16.3%)
合計	5	41	286	332 (100%)

上記の表の結果から、日本語のオノマトペ全般の英語への翻訳という観点から見ると、少なくとも以下の3点の傾向性を指摘することができるであろう。

- (A) 日本語のオノマトペの英語への翻訳においては、動詞をはじめとして、副詞、形容詞、名詞などで表現されるケースがほとんどである。
- (B) 日本語のオノマトペの英語への翻訳においては、英語でもオノマトペで表現することは少ない。
- (C) 日本語のオノマトペの英語への翻訳においては、訳出していないケースは決して少なくはない。

最後に、本稿では、日本語の小説とその英語訳版を比較を通じて、日本語がオノマトペというすぐれて感覚的な表現を多用するのに対し、英語では一般動詞や副詞で表現することがほとんどである、という従来から指摘されてきたことの再検証ができたと思われる。

【注】

- 1) 本稿で、「オノマトペ」という用語は、「擬声語」「擬音語」「擬態語」の三者を総称的に指す場合に用いる。なお、「オノマトペ」は、onomatopéeというフランス語に由来する、といわれる(玉村 1988: 34)。なお、「擬声語」「擬音語」「擬態語」の三者をひっくるめて、「模写語」という言い方もある(田守・スコウラップ 1999: 6)。
- 2) これはオノマトペが日本語特有のものである、という意味ではない。日本語以外の東洋諸語、例えば、中国語、朝鮮語(韓国語)やアフリカ諸言語などもオノマトペが豊富な言語として知られている(亀井・他 1996:158)。
- 3) 一般動詞とはいってもこれらの動詞は語源的にはほとんどがオノマトペに由来するものである。しかも、英語の場合は概念化が強いので、特に非母国語話者の語感では、オノマトペであるということを気づかせ

- にくくしているのであろう(椋垣1961: 253)。
- 4) 音象徴とオノマトベとははっきりと区別されるべきである。音象徴とは、ある言語のある語の特定の音形が特定のイメージや意味と結び付けられていることである。例えば、英語の代表的な音象徴としては、(語頭) sn- 「鼻に関係する」 *sneeze, sniff, snob, ...,* gl- 「光に関連」 *glitter, glisten, glow, ...,* sp- 「水分や湿り気」 *sprinkle, splatter, splash, spill, ...,* sl- 「不規則な、時として遅いのろろした動作」 *slink, slither, sluggish, slipper, ...,* 「湿気や汚染」 *slimy, slobber, slush, slops, ...,* fl- 「速い動作」 *flutter, flap, flicker, ...,* st- 「停止や中断」 *stop, stammer, stutter, stumble, ...,* scr- 「摩擦、比喩的に抵抗」 *screech, scream, scratch, scrub, ...,* squ- 「圧力を伴う摩擦」 *squeeze, squish, squeak, ...,* (語尾) -ash 「急激な、激しい動作の表現」 *dash, clash, lash, bash, ...,* -er 「繰り返して行なわれるリズムカルな動作」 *shimmer, flutter, flicker, ...* などがある(Jordan 1982: 119-122)。
- 5) 日本語のオノマトベを「擬声語」「擬態語」あるいは「擬音語」「擬態語」という2項対立でとらえた辞典・辞書・研究書が多いが、浅野(1978)では「擬音語1」「擬態語1」という2項対立を基本に据えつつも、「擬音語1」を「擬音語2(無生物の音をあらわすもの)」と「擬声語(生物の声を表すもの)」との二つに分け、「擬態語1」を「擬態語2(無生物の状態を表すもの)」、「擬容語(生物の状態・動作容態を表すもの)」、「擬情語」(人間の心の状態を表すようなもの)の三つに分けており、結果的に精密な分類となっている。
- 6) Jordan(1982: 117)には、「チカチカする / flash」「ペチャンコになる / become smashed」「パンと開く / snap open」「キヤーキヤー言う / shriek」に見られる対比のように、日本語では一般的な動作(する、行く、来る、など)が擬声語・擬態語で形容されることにより特殊な表現になるのに対し、英語では特殊な動作は個別の動詞を使うことによって表されるという指摘があるが、「にこにこ笑いながら」をgrinning broadlyと訳すのはこの指摘への反証とも言える。
- 7) 牧野(1996: 142)は、「彼は不合格の通知を受けて、ガックリした / 意気消沈した」「好きな男の子にデートに誘われて、彼女はウキウキしていた / 心がはずんだ」「朝シャワーをあびると気分がスカッとす / 爽快だ」「赤ちゃんがベッドでスヤスヤと / 気持ちよさそうに静かに眠っている」「あの人はものをズケズケ / 直接法で言い過ぎる」というオノマトベを用いた表現と非オノマトベによる表現を対比的に挙げ、非オノマトベによる表現は分析的で距離感があるが、オノマトベによる表現は、聞き手の心にイメージを起こしやすく、それだけ直接訴える力が強い、と結論している。
- 8) 日本語のオノマトベが英語への翻訳において、どのような表現形式をとるか、ということについては(小島1988: 169-172)に以下のようなごく大まかな分類がある：(i)日本語の擬声・擬態語がそのまま英語でも擬声・擬態語で表せる場合。これはごく限られた場合である。英語では語順が倒置されることが多い。「ぼんとコルクが抜けた(Pop went the cork.)」、「ずどんと銃声がひびいた(Bang went the gun.)」(ii)日本語の擬声・擬態語が英語の擬声・擬態語から派生した動詞や名詞として表される場合。これは(i)に比べるとかなり多い。しかし、前述したように英語ではすでに擬声・擬態語としての語感を失っているものも多く、英語学習者はそういう感じでこれらの語を記憶していないので、翻訳の際には思いつくだにある程度困難が伴う。「花瓶ががちゃんと床に落ちた(The vase crashed to the floor.)」、「老婆が通りをとほとと歩いていった(An old woman plodded along the street.)」、「ロープがぶつりと切れた(The rope snapped.)」、「彼は鞭をびしりと鳴らした(He snapped his whip.)」、右の、snapのように、いくつかの日本語の擬声・擬態語に対する共通した訳語となり得るものもある。「彼はドアをばたんと閉めた(He banged the door.)」、「時計のかちかちいう音が聞こえた(I heard the ticking of the clock.)」(iii)日本語の擬声・擬態語を英語では「with + 擬声・擬態語」の形で表す場合。これは(ii)の場合の変形と考えてよい。「彼女は本をばたりと閉じた(She shut the book with a snap.)」、「彼はドアをばたんと閉めた(He slammed the door with a bang.)」(iv)日本語の擬声・擬態語を英語では一般語の副詞で表す場合。英語では擬声・擬態語は使われな

いが、日本語の擬声・擬態語と英語の副詞がほぼ一対一の対応をするので日本人には扱いやすいケースである。「彼はかんかんに怒った〔He got very angry.〕,「雨がざあざあ降っていた〔It was raining very hard.〕,「列車はぴたりと予定時刻に着いた〔The train arrived exactly at the scheduled time.〕,(v)日本語の擬声・擬態語を英語では一般の動詞や名詞で表す場合。「たじたじ」などはこの部類に属する。英訳にはある程度の困難が伴う。「彼女は騒音でいらいらしていた〔She was irritated by the noise.〕,「酔っばらいがふらふらと歩いていった〔A drunken man staggered along the street.〕,「一日中ぶらぶらしてはいけない〔Don't loaf around all day long.〕,「彼女はにこにこしてあいさつした〔She greeted me with a smile.〕,(vi)意識を必要とする場合。かなり慣用的な表現に多い。「ぐずぐずしてはいられない〔There is no time to lose.〕,「歯が一本ぐらぐらしている〔I've got a loose tooth.〕,「さんざんな目にあつた〔We had a hard time of it.〕

- 9) 「訳出なし」の割合が全体の54 / 332(16.3%)と2割近くを占めている。いくつかの要因が関与していると思われるが、一つには、翻訳者としての非日本語母国語話者の外国人にとってオノマトペの把握が難しい、ということも考えられるかもしれない。実際、玉村(1988: 34-35)には、「外国人が(日本語のオノマトペを)難しいと思う理由」として、(i)語数が多いこと、(ii)前項に関連して、類似語形(variants)が多く、しばしばそれらが1つの体系をなしていること(コロコロ/コロン/コロリ/コロッ/コロリン/.....)、(iii)オノマトペは語形が語義を規定する特別な語類であるが、語形と語義の関係の理解・把握が容易でないこと、(iv)日本人がよく使うのに、辞書に採録されていないものが多いこと、の4点が挙げられている。これに関連して、牧野(1996: 142-143)にも「模写語(=オノマトペ)の使えない日本語学習者は、コミュニケーションでの強力な武器を欠いていることになります。ただ、特に印欧語の母語者は模写語を学習しにくい深い事情が一つあります。それは、日本語では模写語がかなり広範なジャンルで使われ、しかも大人が使っているのに対して、英語など印欧語では、ほとんどが大人(特に親)と幼児の間の会話とか、子ども同士の会話とか、子ども向けの童話の本に限られているということです。印欧語では、模写語は一種の幼児語(baby talk)なのです。印欧語を母語とする日本語の学習者で、レベルが高いのに、模写語を日本人のように使いきれない学習者を私はかなり知っていますが、おそらくそれは印欧語の模写語の持つ幼児性が心理的なブレーキになっているのではないかと思います」という記述がある。

【参考文献】

- 浅野鶴子(編) 1978 『擬音語・擬態語辞典』角川書店
 飛田良文・浅田秀子(2002) 『現代擬音語擬態語辞典』東京堂出版
 石橋幸太郎(編) 1973 『現代英語学辞典』成美堂
 Jorden, E.H. (1982) 『擬声語・擬態語と英語』, 國廣哲彌(編) 『発想と表現』(日英語比較講座第4巻) 大修館書店, 111-140.
 亀井孝・他(1996) 『言語学大辞典』(第6巻 術語編)三省堂
 小島義郎(1988) 『日本語の意味 英語の意味』南雲堂
 九頭見一士(2003) 『ことばの海へ』南雲堂
 牧野成一(1996) 『ウチとソトの言語文化学』アルク
 Matthews, P.H. (1997) *Oxford Concise Dictionary of Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
 大塚高信・中島文雄(監修) 1982 『新英語学辞典』研究社
 玉村文郎(編) 1988 『新しい日本語学を学ぶ人のために』世界思想社
 田守育啓・スコウラップ, ローレンス(1999) 『オノマトペ - 形態と意味 - 』くろしお出版
 田中春美(編) 1988 『現代言語学辞典』成美堂

Trask, R.L. (1997) *A Student's Dictionary of Language and Linguistics*. London: Arnold.
榎垣実(1961)『日英比較語学入門』大修館書店